

家具よもやま話 No.3

小長谷 光

前二回は椅子の話でしたので、今回は箱物を取り上げました。名称の英語表現が、解釈の違いで全く別用途のものになってしまった例で、「ドレッサー」という品目です。

ドレッサーと聞けば日本人のほとんどの方は鏡が付いた化粧台をイメージされると思いますが、化粧台の正しい英語表現はドレッシングテーブル又はトイレットテーブルになります。

欧米でドレッサーというのは、絵皿や壺などの陶磁器を飾ったり、食器を収納する飾り棚兼収納戸棚のことですが、日本では長い間、化粧台と思われており、家具業界でもこれで通用してきたことから今となっては間違いとは言いきれません。

ではなぜこのような解釈の違いが生じたのか…、これはあくまで私見ですが、まずは英語力の問題。第2は本来の飾り棚のドレッサーが日本ではあまり定着しなかったからと考えます。その理由として「手本となる外国のものが大きすぎる」「高い位置に多数の陶磁器を飾る風習がない」などではないでしょうか。そしてその根底にコレクションのように多くのものをディスプレイする文化と、和室の床の間や違い棚のような建築的装備に最小限のもので演出するような文化の違いが歴史的にあるように思います。

一方で化粧台と解釈されたドレッサーは住宅スペースの用途分化の過程で、パウダールームがなくても使える便利なものとして定着したのではないかと考えますが、ドレッサーと呼ぶようになった発端は単純にそう呼んだ人がいただけなのかもしれません。

写真①はスイスのジュネーブ歴史美術館蔵で17世紀のBUFFET DRESSOIR となっているので、下の扉部分が収納棚で、上が飾

り棚という典型的なドレッサーです。素材のウォルナットにすばらしい彫刻が施されており、何かを飾る必要をかんじないぐらいすばらしい逸品です。

写真②は、推測ですが、17世紀初期イギリスのオーク材のドレッサーで、棚の上下の間隔が違うのは飾る物のサイズに合わせたのでしょう。中段の3つの引き出しはシルバー類かカップの収納だったかもしれません。下段のオープン部は壺のような高さのあるものを飾ったのではないのでしょうか。



写真①

COMPLETE BUFFET DRESSOIR (W1,295 D520 H1,016)



写真②

oak dresser with three drawers (サイズ不明)

京都府インテリア設計士協会 KIDS 企画

熊川宿・年縞博物館 バスツアーに参加して

吉矢 詳子

3月3日ひな祭り、KISのバスツアーに参加しました。

若狭街道は日本海から京都まで、サバなどの魚を運んだことから鯖街道と呼ばれ、その街道沿いの宿場が熊川宿です。平成8年に重要伝統的建造物群保存地区、通称「重伝建」に制定されました。街道に面して多様な形式の建物が立ち並んでいます。異なる形式の建物が混在しながらも連続した家並みを形成し、電線類が地中化され、1km余り電柱の無い広く開けた街並みです。

重伝建保存地区は日本のあちこちにありますが、案外何処も「よく似た顔」をしています。それは整備され過ぎ、行き届いている感があるのかも知れません。



しかし、ただ保存するだけではだめで、人々がここで暮らし、伝統を踏まえつつ新たな動きを作り出さなければいけないのです。少子化高齢化の進んでいる地区の定住者を増やし、街を活性化していくことが重要です。

現状は観光地として人を呼ぶことにこだわりすぎて、生活感のないきれいなすぎる映画のオープンセットのような感じがしました。行政が町並み保存と町の人たちの生活支援を同時に推進するのはなかなか難しいのでしょうか。

小浜の海沿いのフィッシャーマンズワーフで昼食を頂いた後、三方五湖のひとつ水月湖岸に建つ二つの博物館へ。

「年縞博物館」は年代測定の世界標準のものさしである「年縞(ねんこう)」を展示しています。

年縞とは「泥の地層」のこと。季節による堆積物の違いによる「明暗一対の縞」が1年かけて1層づつ積もるので、泥がシ

マシマになります。ここでは世界一長い45mの「シマシマ」が採集することに成功しました。積み重ねて7万年分の地球の歴史です。「7万年かけて一体いつの時代？」私の知的レベルでは「意味わからん」地味な展示でした。

建物は、内藤廣氏の設計で一直線でのびやかな切妻屋根が湖畔のロケーションとマッチし、素敵です。

お隣の古墳を模した「縄文博物館」は、かつてこの一帯に高度な文明生活をしてきた縄文人の生活を立体的に展示しています。小学生の時、社会の時間に習った見覚えのある丸木船や貝塚とか土器です。

あいにく、小雨が降ったりやんだりでしたが、道の駅でお買い物もでき、渋滞もなく、たっぷり楽しめた一日でした。



OIS

大阪府インテリア設計士協会

〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14 TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553

URL <http://jp-interior.or.jp/ois>

E-mail ois@jp-interior.or.jp

facebook 「大阪府インテリア設計士協会」

発行人：河野 洋二

編集：OIS 第1事業部会

新しい時代到来！ 令和 No.107

総会報告

4月19日、OISの平成31年度総会が大阪市立難波市民学習センターで行われた。

河野会長の挨拶のあと、30年度事業報告書・収支計算書、31年度事業計画案・予算案が審議された。議案は全て満場一致で承認された。

今年は、2年に一度の役員改選年。一部退任理事があったものの、会長以下全員が再任され、新しい「令和」に向けスタートを切った。

総会終了後は席を移し懇親会が行われ、話題もはずみ、終始和やかなうちに散会した。



HASHIRIGAKI

葉知利書



令和元年にあたり 会長 河野 洋二

平成は、不況や阪神淡路大震災、東日本大震災など自然災害が襲った厳しい時代でした。想定外と片付けてしまえば楽ですが、これからのことを思うとそうもいきません。いずれ時がたてば、「平成」とはどういう時代だったか、検証されるでしょう。

心機一転、「令和」の時代に入り、ますますコンピュータが進化し、AI が普通になり、仕事や生活がさうとう変わっていく中、OIS も変化せざるを得ません。

時代を生きるには、新しい若い人たちが中心を担っていくことが必要です。一方、旧来の会員も新しい時代に何か「記念碑」になることを成し遂げていただきたいと思います。そのためには是非、皆がいろいろな催しに参加していただき、老若男女を問わず、頻りに交流を深めれば、OIS の存在意義が高まります。

高みを目指して魅力あるインテリア設計士協会を、皆で盛り上げていきましょう。



2019 初詣と新年会

恒例の初詣を1月6日に「お初天神(露天神社)」で行いました。

参加者は16人、拝殿でOISの発展と会員皆様の活躍と健康を祈念するお祓いを受け、河野会長が玉串奉納し、お神酒をいただきました。

その後、近くの「がんこ曾根崎本店」に席を移しての懇親会。乾杯のあと、今年は皆でOIS特製のおみくじを引き、各々が今年の運勢を読み上げました。

また、改元を前に次の元号を予想しました。結果は全員はずれでしたが「令和」を当てることは難しかったですね。(記・事務局)





一般社団法人日本インテリア設計士協会 第53期通常総会



古田会長



感謝状を受け取る 山野さん

SJIT 第53期通常総会 愛知で開催

本部SJIT日本インテリア設計士協会の第53期通常総会は5月18日、愛知県のサイプレスガーデンホテルで開催された。参加者は例年同様の66人で、定款により総会は成立し、定刻の午後3時に開会した。

最初に協会の先駆者の御霊に黙祷を捧げた後、古田会長からの挨拶があり、議案審議に入った。

1号議案の30年度事業報告及び第2号議案の決算報告・監査報告が満場一致で承認され、引き続き3号議案の定款変更の件、4号議案の役員改選が行われた。一部役員の変更があったが、古田会長、及び副会長、専務理事の続投、その他役員が決定した。

残念ながら熊本県インテリア設計士協会が後継者不足により、解散が発表されたが、母体は大分県インテリア設計士協会に引き継ぐという形で報告された。熊本の山野さんには、長年の功績がたたえられ感謝状が贈られた。

その後、平成31年度事業計画案、収支予算案も承認され、来年は広島での開催が決定した。

赤字決算が続いているが、会員・受験者の増強のためブロック制度の導入、商標登録された「インテリア設計士」のPRを含め、



大阪のメンバー

今期の取り組みが報告された。

総会後は愛知県インテリア設計士協会の伊藤会長から名古屋近郊・津島市の茶室について講演と名古屋市観光文化交流局の谷川氏から翌日観光する「名古屋城天守閣と本丸御殿完成」の講演を受けた。



伊藤さん

伊六万歳

懇親会の余興では尾張万歳の流れをくむ「伊六万歳」が披露された。なんと出演者の一人に伊藤会長がいらっしゃったのにはびっくりした。その後、和気藹々とした

支部との交流を深めた。

翌19日は、まず名古屋城本丸御殿を見学した。徳川家康によって建てられ、家光により改修された本丸御殿は、尾張藩主の住居・政庁として使用された、総面積約3,100㎡、部屋数は30を超える平屋の建物。それぞれの部屋が徳川幕府初期の威厳を示していた。

次の場輝荘は、大正から昭和初期にかけて名古屋が本居の佛松坂屋初代社長・伊藤次郎左衛門祐民によって建てられた別邸。各界の要人や文化人が往来する迎賓館として華やき、アジアの留学生が寄宿して国際的なコミュニティを形成した場所でもあった。北館の「伴華楼」、南館の「聴松閣」と見どころ満載であった。

昼食後は徳川園を見学し、帰路についた。盛りだくさんの見学コースを堪能、愛知の皆様ありがとうございました。

っています。

親友たちも場ですぐ馴染み、篆刻を楽しんで、出来上がった印に満足そうでした。今年もきっと参加したいと思うでしょう。

(記・山田 弘美)



「虹」作品



篆刻教室に参加して

12月10日

宮後先生のご指導で、新年を前にして、心のなかにある思いを文字に込めて無心に彫る。この魅力的な篆刻教室を毎年楽しみにしています。親友を誘ったところ、「前回とてもよかったから」「ぜひやってみよう」と、リピーターの友人も初参加の友人も二つ返事で参加されました。

先生は、まるでゴムか木でも彫るかのように手を動かされるのですが、実際にやってみると相手は石ですから、なかなか思うようには彫れません。それを知っているにも関わらず「こんな印が欲しい」と思うのは「自分が彫れる文字」とかけ離れた無茶な文字で、トライしてあえなく沈没。初参加の時は、どのように仕上げればいいのかわかりませんでした。諸先輩が列を作って先生にアドバイスを求め、手取り足取り「神」修正していただき、文字を整えていける要領を学びました。申し訳ないと思いつつ、今回も「神」頼みで完成した「空間」「虹」の印、とても気に入



酒蔵見学に参加して

2月2日土曜日に兵庫県インテリア設計士協会のイベント、姫路市網干・本田商店の酒蔵見学へ行きました。今回参加したきっかけは、私はお酒が好きで酒蔵見学に興味があり、試飲も出来ると思ったからです。参加者の中でも最年少でしたが、皆さん優しく接して下さい、すぐに馴染めました。

見学してみても、お酒って手間暇かけて作られているから、こんなにも美味しく出来るんだと思いました。

蔵の中は日本酒のいい香りが漂っていました。見学が終わり、みんなで昼食を食べました。その時、待ちに待った日本酒の試飲！甘みがあるお酒から辛口のお酒まで、今まで呑んだことがない美味しさでした。私が一番気に入ったのは「雄町」という銘柄。辛口なんですけど奥深くに甘みを感じ、とても飲みやすいお酒でした。お弁当もとても美味しくいただきました。

見学が終わったあと、初対面の人たちが二次会に誘ってくれました。そこでも地酒を頂き、色々お酒のことや四方山話

を教えてくださいの方がいて、とても勉強になりました。まだ参加していない人がいたらぜひ参加してみてください。そうすればこの楽しさを感じることが出来ると思います。行動に移さないと何も変わらないので、これから色々参加したいと思います。他のイベントも参加することでそこで得られるものがきっとあると私は思ったので、積極的に参加したいなと思いました。



(記・谷島 朱美)

2018 事遊展 & 忘年会 からほり悠で開催

OIS事遊展 & 忘年会を昨年12月7日(金)に前回と同じく古民家「からほり悠」で実施しました。参加者は22人、1階で忘年会、2階に作品が並んでいます。

今年のテーマは「秋」です。秋を連想する作品のほか、自由作品が全部で13作品集まりました。忘年会の前に、2階に移動し、出展者から作品についての説明を受け、皆で人気投票をした結果、最優秀賞には吉矢さんの「実りの秋」が、優秀賞に学生の江上さんの作品がそれぞれ選ばれました。

忘年会は女性会員の協力でお好み焼きや焼きそばなど暖かい料理も提供されました。また、愛知支部からも河村副会長に駆けつけていただき、盛会のうちに終わりました。

今年はどこで行いましょうか、どこぞという会場があればお教えください。



江上さん



吉矢さん「実りの秋」



映画とインテリア No.1 今井 俊夫

「映画とインテリア」をテーマに、時々書きたいと思います。今回ご紹介するのは、ドキュメンタリー映画「アイリス・アプフェル! 94歳のニューヨーカー」(2015年/アメリカ)です。

アイリス・アプフェルは現在97歳。アメリカの実業家、インテリア・ファブリックデザイナーです。2005年メトロポリタン美術館にて、急場しのぎに借り出された彼女の服飾、ジュエリーの展覧会で一躍有名になりました。ともかく身の回りがカラフルな色彩に溢れ、超高齢とは思えないバウフルでユーモアセンス抜群。廻りの人々を虜にする様が生き生きと描かれています。

彼女の「華やかな」仕事は、学生時代にアートの歴史を学び、世界を旅することで磨かれたことが映画の中でわかります。学生からシニアまでインテリア関係者必見の映画です。

監督はドキュメンタリー映画の鬼才アルバート・メイブルス(※)。映画の中にカメオ出演しています。余談ですが、日本に「情熱大陸」や「プロフェッショナル」など人気のドキュメンタリー番組がありますが、どちらかといえばナレーションが多く、主人公を持ち上げ過ぎて、私は好きになれません。その点、この映画はノーナレで、本人や関係者のインタビューと控えめな音楽で構成されています。アイリスと夫のコールとの日常が淡々と描かれていて、何度見ても飽きません。

百聞は一見に如かず。ご紹介する映画のDVDを暫く事務局に預けます。興味のある方は、是非ご覧下さい。

彼女のスタイルに、人生のヒントがある。



IRIS APFEL

アイリス・アプフェル!

94歳のニューヨーカー

※アルバートの傑作「Grey Gardens」(1975年/アメリカ、弟のデイヴィッド・メイブルスとの共作、英語)は、YouTubeで見られます。